1番

わが衣手は 露にぬれつつ

天智天皇

2番

衣ほすてふ 天の香具山

持統天皇

3番

ながながし夜を ひとりかも寝む

柿本人麻呂

4番

富士の高嶺に 雪は降りつつ

山部赤人

5番

声きく時ぞ 秋は悲しき

猿丸大夫

6番

白きを見れば 夜ぞふけにける

中納言家持

7番

三笠の山に 出でし月かも

安倍仲麿

8番

世をうぢ山と 人はいふなり

喜撰法師

9番

わが身世にふる ながめせしまに

小野小町

10番

知るも知らぬも 逢坂の関

蝉丸

11番

人には告げよ あまの釣舟

参議篁

12番

をとめの姿 しばしとどめむ

僧正遍昭

13番

恋ぞつもりて 淵となりぬる

陽成院

14番

乱れそめにし われならなくに

河原左大臣

15番

わが衣手に 雪は降りつつ

光孝天皇

16番

まつとし聞かば 今帰り来む

中納言行平

17番

からくれなゐに 水くくるとは

在原業平朝臣

18番

夢の通ひ路 人目よくらむ

藤原敏行朝臣

19番

逢はでこの世を 過ぐしてよとや

伊勢

20番

みをつくしても 逢はむとぞ思ふ

元良親王

21番

有明の月を 待ち出でつるかな

素性法師

22番

むべ山風を 嵐といふらむ

文屋康秀

23番

わが身一つの 秋にはあらねど

大江千里

24番

紅葉の錦 神のまにまに

菅家

25番

人に知られで くるよしもがな

三条右大臣

26番

今ひとたびの みゆき待たなむ

貞信公

27番

いつ見きとてか 恋しかるらむ

中納言兼輔

28番

人目も草も かれぬと思へば

源宗于朝臣

29番

置きまどはせる 白菊の花

凡河内躬恒

30番

暁ばかり 憂きものはなし

壬生忠岑

31番

吉野の里に 降れる白雪

坂上是則

32番

流れもあへぬ 紅葉なりけり

春道列樹

33番

しづ心なく 花の散るらむ

紀友則

34番

松も昔の 友ならなくに

藤原興風

35番

花ぞ昔の 香ににほひける

紀貫之

36番

雲のいづこに 月宿るらむ

清原深養父

37番

つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける

文屋朝康

38番

人の命の 惜しくもあるかな

右近

39番

あまりてなどか 人の恋しき

参議等

40番

ものや思ふと 人の問ふまで

平兼盛

41番

人知れずこそ 思ひそめしか

壬生忠見

42番

末の松山 波越さじとは

清原元輔

43番

昔はものを 思はざりけり

権中納言敦忠

44番

人をも身をも 恨みざらまし

中納言朝忠

45番

身のいたづらに なりぬべきかな

謙徳公

46番

ゆくへも知らぬ 恋の道かな

曾禰好忠

47番

人こそ見えね 秋は来にけり

恵慶法師

48番

くだけてものを 思ふころかな

源重之

49番

昼は消えつつ ものをこそ思へ

大中臣能宣朝臣

50番

長くもがなと 思ひけるかな

藤原義孝

51番

さしも知らじな 燃ゆる思ひを

藤原実方朝臣

52番

なほ恨めしき 朝ぼらけかな

藤原道信朝臣

53番

いかに久しき ものとかは知る

右大将道綱母

54番

今日を限りの 命ともがな

儀同三司母

55番

名こそ流れて なほ聞こえけれ

大納言公任

56番

今ひとたびの 逢ふこともがな

和泉式部

57番

雲隠れにし 夜半の月かな

紫式部

58番

いでそよ人を 忘れやはする

大弐三位

59番

かたぶくまでの 月を見しかな

赤染衛門

60番

まだふみもみず 天の橋立

小式部内侍

61番

けふ九重に にほひぬるかな

伊勢大輔

62番

よに逢坂の 関はゆるさじ

清少納言

63番

人づてならで 言ふよしもがな

左京大夫道雅

64番

あらはれわたる 瀬々の網代木

権中納言定頼

65番

恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ

相模

66番

花よりほかに 知る人もなし

大僧正行尊

67番

かひなく立たむ 名こそ惜しけれ

周防内侍

68番

恋しかるべき 夜半の月かな

三条院

69番

竜田の川の 錦なりけり

能因法師

70番

いづくも同じ 秋の夕暮れ

良暹法師

71番

芦のまろやに 秋風ぞ吹く

大納言経信

72番

かけじや袖の ぬれもこそすれ

祐子内親王家紀伊

73番

外山の霞 立たずもあらなむ

権中納言匡房

74番

はげしかれとは 祈らぬものを

源俊頼朝臣

75番

あはれ今年の 秋もいぬめり

藤原基俊

76番

雲居にまがふ 沖つ白波

法性寺入道前関白太政大臣

77番

われても末に 逢はむとぞ思ふ

崇徳院

78番

幾夜寝覚めぬ 須磨の関守

源兼昌

79番

もれ出づる月の 影のさやけさ

左京大夫顕輔

80番

乱れて今朝は ものをこそ思へ

待賢門院堀河

81番

ただ有明の 月ぞ残れる

後徳大寺左大臣

82番

憂きにたへぬは 涙なりけり

道因法師

83番

山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

84番

憂しと見し世ぞ 今は恋しき

藤原清輔朝臣

85番

閨のひまさへ つれなかりけり

俊恵法師

86番

かこち顔なる わが涙かな

西行法師

87番

霧立ちのぼる 秋の夕暮れ

寂蓮法師

88番

みをつくしてや 恋ひわたるべき

皇嘉門院別当

89番

忍ぶることの 弱りもぞする

式子内親王

90番

濡れにぞ濡れし 色は変わらず

殷富門院大輔

91番

衣かたしき ひとりかも寝む

後京極摂政前太政大臣

92番

人こそ知らね 乾く間もなし

二条院讃岐

93番

あまの小舟の 綱手かなしも

鎌倉右大臣

94番

ふるさと寒く 衣打つなり

参議雅経

95番

わがたつそまに 墨染の袖

前大僧正慈円

96番

ふりゆくものは わが身なりけり

入道前太政大臣

97番

焼くや藻塩の 身もこがれつつ

権中納言定家

98番

みそぎぞ夏の しるしなりける

従二位家隆

99番

世を思ふゆゑに もの思ふ身は

後鳥羽院

100番

なほあまりある 昔なりけり

順徳院